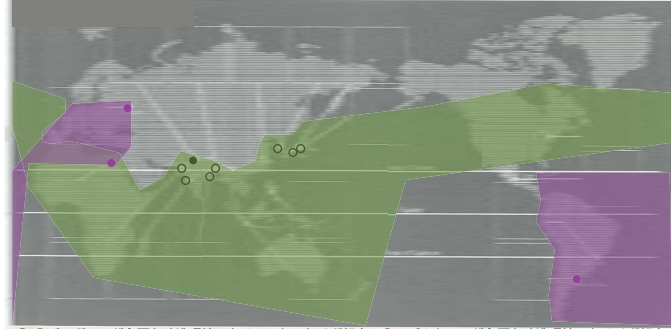


バンガローとアパートマンの分布



●○バンガローが主要な建造環境である / であったメガ都市 ● アパートマンが主要な建造環境であるメガ都市



長崎のバンガロー



ブエノスアイレスのアパートマン

全球規模で分布する居住環境の類型が現れるのは19世紀である。ヨーロッパ諸帝国の居住環境が植民地の拡大とともに拡散し、汽船航路や鉄道網の発達により普及した。ポルトガル、スペイン、オランダなど植民宗主国ごとに特徴的な居住環境の系列を有するが、イギリス植民地発のバンガローはその最も顕著な例である。バンガローはイギリスの住宅そのものではない。インドで生活するヨーロッパ系居住者の都市近郊住宅として、ベンガル地方の様式を取り入れて18世紀頃成立したとされる。外部の生活空間として住宅の周囲に巡らせたペランダが特徴的である。イギリス本国、北米、アフリカ、東南アジア、オーストラリアの各植民地でも熱帯の気候に適した住宅として導入され、香港、上海、長崎、神戸、横浜などの租界や開港地でも建設された。20世紀に富裕層の居住環境として世界を席卷した田園都市（ガーデンシティ）の淵源ともされる。また、北米大陸の主要な住宅の型となり、日本へはアメリカ経由でもたらされている。現在の住宅によく見られる屋根つき玄関ポーチの1つの起源はこのバンガローのペランダである。植民地で生まれた新しい居住環境類型がどの町でも見られる日常の光景の要素となった。全球規模で分布する居住環境の今ひとつの類型は、フランス発のアパートマンである。統一的な装飾を有する5階建て程度の石造アパート群が広幅員の直線道路の両側に建ち並び、見通しの強調された景観を形成するのが特徴である。19世紀の「近代」的居住環境として中南米、北アフリカ、ロシアへ拡がった。

ショップハウスとチョールの分布



● ショップハウスが主要な建造環境であるメガ都市 ● チョールが主要な建造環境であるメガ都市



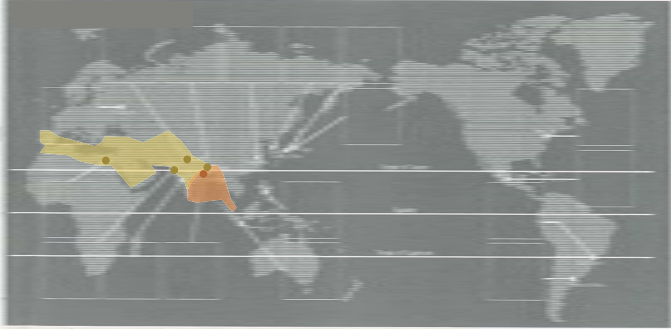
シンガポールのショップハウス



ムンバイのチョール

植民地のネットワークによって伝播したのは宗主国の居住環境だけではない。植民地化による地域統合は非ヨーロッパ系商人層や建設技能者の海外展開をも刺激した。植民地統治者と彼らの活動とが相俟って、出身地域の住宅もまた広域で建設されるようになった。その代表的な例はショップハウスである。中国南部の都市に見られる主要な居住環境類型に由来する。主に福建出身の華人の進出とともに東南アジア伝播していた、奥行き長く戸界壁を共有する店舗併用住宅とヨーロッパ由来のアーケードが組みあわさった形式である。シンガポールの創設者ラッフルズが1822年に住宅前面に歩廊を設ける条例を定めたことで定型化したとされる。イギリス植民地を中心とする華人の展開とともに、西はコロンボ（スリランカ）から東は仁川（韓国）、東京（日本）にまで拡がった。現在の東南アジア諸都市の主要な居住環境類型となっている。南アジアにおいて、ショップハウスと比肩するのが西インド、グジャラート地方に由来するとされるチョールである。港湾都市において、主として工場あるいはプランテーション関連産業の労働者の住まう住宅として発達した形式である。細長い通路に沿って間口3m程の室が並び、各室が1戸を成すこと、トイレ、水場を共有することが特徴である。インドの経済中心都市ボンベイ（現ムンバイ）で建設されたアジア最初の公共集合住宅にもこの形式が採用された。インド洋の西半分であるアラビア海沿岸の諸都市に分布する。

アラブとタミルナードゥの中庭型住宅の分布



● アラブの中庭型住宅が主要な建造環境であるメガ都市 ● タミルナードゥの中庭型住宅があるメガ都市



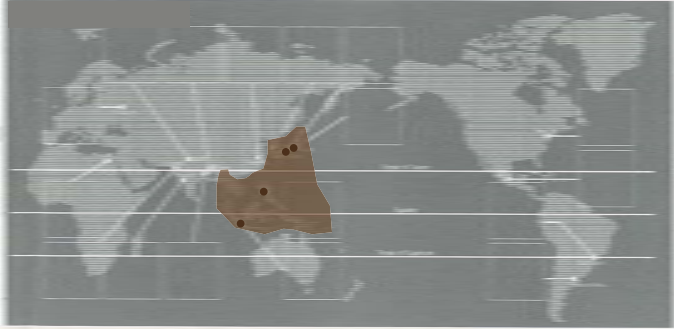
カイロの中庭型住宅



タミルナードゥの中庭型住宅

ヨーロッパ植民地期以前には、国家の拡張、収縮や地域間貿易を反映して、多種の居住環境類型がそれぞれに地域を跨ぐ拡がりを持っていた。モンゴルから中央アジアを経てトルコに及ぶ範囲で見られる移動式住居ゲルや、アラブから北アフリカに拡がる天幕住居、東南アジア、東アジアを中心とするボートハウスなどその拡がりは広範であった。ここではそうした居住環境類型としてアラブの中庭型住宅と南インドのタミルナードゥを中心とする中庭型住宅の分布を挙げる。アラブの中庭住宅の1つの典型は、日中床面まで日の射込まない深い中庭を有する。乾燥した気候における昼夜の寒暖の差を利用して中庭の床面は冷やされ、日中室内を涼しく保つ働きをする。こうした住居が密集し、枝分かれて曲がりくねった路地を形成するのが居住環境類型の特徴である。アラブの中庭住宅はイスラームの成立以前から既に存在していたが、南アジアへは8世紀にはじまるのムスリムの伸長とともに持ち込まれ、定着していったと考えられる。16世紀後半から17世紀に最盛期を迎えたムガル帝国の頃に、現在同様東はダッカ（バングラデッシュ）南はティルチラッパリ（南インド、タミルナードゥ州）までの拡がりを有していた。住宅の起源をメソポタミア文明に遡ればローマや地中海沿岸に拡がる中庭型住宅と類縁関係にある。タミルナードゥの住宅の中庭は広く、雨水をためる役割を持つ。住居の前面にペランダを有し、戸界壁を共有して直線の街路に沿って並ぶ。タミル人の移動とともにスリランカに拡がり、イギリス植民地の拡張とともにマレー半島、ミャンマーに展開した。東インドの Kolkata にも見られる。

高床式住宅の分布



● 高床式が主要な建造環境であるメガ都市



マラッカの高床式住宅



マニラの高床式住宅（19世紀末）

インドネシアをはじめ東南アジアを中心に、構造材に木を用いて地面より上の地点に床を張って生活する、高床式住宅が広く分布する。地面から床までの高さは時に3mに達し、母屋を覆う大型の屋根とともに印象的な姿をつくりだしている。こうした建築の形態は、紀元前1500年から紀元1世紀頃まで現在のベトナム北部を中心に栄え、中国南部（雲南）からインドネシア東部までの拡がりを有したドンソン文化に特徴的な銅鼓に描かれた家屋模様やそれを改造した貯貝器の装飾に見ることができ、同様の家屋の図像はボルネオやアンコールワットの壁画でも確認できる。言語学の立場からは、台湾から発生し、紀元前3000年頃にフィリピンへ、そこからインドネシアへと渡ったと考えられる、オーストロネシア語族が既に高床の住宅に住んでいたと論じられる。この語族は東は太平洋のイースター島、西はインド洋西端のマダガスカル島（紀元400年頃到達）におよぶ拡がりを有する。日本語もまたオーストロネシア語族に属すとされ、弥生時代の家屋文鏡や銅鐸、家型埴輪と同様の家屋の姿が見られる。こうした知見に立つと、現在日本で見られる木造住宅の床は地面から数十センチ上がった程度であるが、高床式住宅の系譜を引くものと言えるだろう。

Kolkata



Dhaka



Jakarta



Manila



Shanghai



Seoul



Osaka, Kobe, Kyoto



Tokyo

